
月夜の殺人鬼と螺子持つ男

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の殺人鬼と螺子持つ男

【Nコード】

N4406Z

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

嗚呼、今夜は人を殺すには良い月だ。それは始まり。終わったと思われた猟奇的殺人事件は再び巻き起こる。そして自分と同じ顔をした殺人鬼が、笑う。今宵、影絵ノ街ニテ君ヲ待ツ。そして物語は幕を開けた。

(前書き)

今回短編小説。

如何でしょうか？

学ラン三人組の物語で御座います。

それではどうぞ

触れてしまえば壊れてしまいそうな青い月。
静かに空を漂い、流れて消える灰色の雲群。
吹き抜ける風は何だか冷たくて 切ない。
寂寥感に背筋が粟立ち、人、動物皆無のこの通りを歩む少しだけ
の恐怖に心が躍る。

あれから一年と言う歳月が過ぎ、遠野志貴は事件に関わった少女
達と共に、あるべき日常を取り戻していた。

そんな普通よりも少しだけ刺激的で、何でもない日々の中、ふと
志貴は奇妙な違和感に気付く。

「 昨日の自分は、何をしていただろうか」

しかしその疑問すら翌朝には全て忘れ去り、祭りの様な楽しい時
間は延々と繰り返されていく。

親しい人達とのひと時、学園生活の喧騒、こうあって欲しいと願
った幸せな日々が、今日の前にある。

それは翌日の事だった。

何時も通りの登校。

隣には別人の様に美しく成長した妹、秋葉が、そして左隣には丸
い眼鏡を掛けた実は教会の者だと言うシエルの姿があった。

瞬間、志貴はソレと擦れ違う。

同じ学生服姿、髪はやや横に跳ね、何処か感情を感じさせない青
年。

青年は己と同じく両方に女性と連れている。その笑顔は本物か、
或いは【仮初の笑顔】か。
擦れ違った。

『君が遠野君か 直死の魔眼、全てを壊す、と言う点に置いては
全てを無かった事にするとする僕のスキルと似ているね』

声が聞こえた。

名前を呼ばれた。

いや、何よりも 何故直死の魔眼を知っている？

志貴は思う。

今擦れ違った奴が、また流行り出した猟奇的殺人事件の犯人では
ありませんように、と。

「一体今の誰に言ったんですか？ 先輩？」

『ん？ んー、僕の知人、かな？』

そして青年の姿は、曲がり角を曲がり消えた。

「嗚呼、何て綺麗な月だろう 殺すには持つて来いの月だよなあ」

薄暗いビル郡の裏路地。

其処を青年はポケットに手をつ突っ込んで歩いていった。

年齢的には志貴と余り変わらない程度。手には奇妙な木製の短い棒を持っている。

「やれやれ 死人をおいそれと起こすなと言う。

折角最低の亡者生活を楽しんでたと言うのに……、目を覚ませば柵だらけの肉の檻、か」

口から漏れるのは、奇怪な言葉の羅列。

「ま、俺を起こしたって事は ？殺せ？って言う、事だよなあ？」

ゾクツ、と。

志貴は彼方の夜空を見た。

この感覚は。

「今宵、影絵の街にて君を待つ」

その言葉を残して、殺人鬼は微笑った。

翌日の深夜零時。

寒気のした居場所へ、

走れ、奔れ、駆れ。

そして再び擦れ違う。

あの時の青年と。

今度は1人、しかし何故か両手には巨大な銀光する螺子を持っていて、

『気を付けなよ、彼は君より強い』

その言葉を残して、消え去った。

どう言う事なのだろうか？

強い？

彼？

疑問に疑問が重なる中、志貴は再び駆け出す。

夜の冷たい風を切りながら、唯寒気のする場所を目指して。

出遭った。

「あーあ、出遭っちまったか……」

目の前には、同じ背格好をした青年。

唯一違つといえば、喋り口調と、眼鏡だけ。

「ま、結果はオーライか……、よう、兄弟、楽しんでるか？」

「嗚呼、全うな人生ならな」

「そいつはまた安穩な　どうも、一回死ななきゃ治らないらしい」

「お前が　今噂されている殺人鬼なのか　？」

問うと同時に正面に快い音を響かせ抜き放たれる、七夜と刻まれた短刀。

目の前の青年は苦笑してから肩を竦め、静かに頷いた。

「嗚呼、俺は岐^{ちまた}じゃ有名な殺人鬼だ　無論、お前の使われなくなつた行動原理なんだがな？」

「どう言う」

「ま、無駄話してると朝になつちまう。
俺は俺としての任務を全うするだけだね」

歪む世界で交錯する藍色と水色の瞳。
直後、舞い散る火花は互いの短刀の刃をぶつけ合った拍子に漏れた周囲を彩る物。

右左と薙ぐ度に、右左と弾かれ、迎撃される。上下に振れば、今度はその隙間を縫う様にして斜め一閃。線が見えて来る。

「視得た」

「相殺」

刹那、信じられない出来事が今、目の前で巻き起こつた。
視得た線を線で相殺する青年。

「今度は俺の番だ　極彩と散れ　……」
煌く水色の瞳。

翻り、全威力速度の乗せられた一撃はそのまま吸い込まれる様に
志貴に迫り、

ツカツァン！！

短刀を弾き飛ばす事で終えた。

「俺の勝ちだな？ 兄弟」

「お、前、 名前は……？」

志貴は跪いて、相手を見上げる様にして尋ねた。

「俺かい？ 俺は七夜だ、七夜志貴。

言っただろう？ 兄弟ってな」

同時に足元から揺れ、薄れ、消えて行く七夜と名乗る青年。

「さあて、タイムリミットだ。

今夜は愉しかったぜ？ 久々に燃えたよ、ま、また殺れたらな、兄弟」

完全に消え去るのは、数秒後の事。

志貴は弾かれた短刀と、あの出来事を脳裏に刻み、消えた七夜に告げる。

「次は 負けない」

と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4406z/>

月夜の殺人鬼と螺子持つ男

2011年12月15日02時50分発行